

シンプルでナチュラルなライフスタイル

—— ナチュラル系雑誌の諸表象 ——

岡 本 裕 介

1 はじめに —— 「ナチュラル」という表象

本稿は、「ナチュラル系」、「シンプル&ナチュラル系」などと呼ばれるライフスタイル誌群(以下、「ナチュラル系」または「ナチュラル系雑誌」とする)について、それがどのような雑誌から成り、どのような記述を含み、何を主張しようとしているかを、ごく大まかに描こうとしたものである。このジャンルにどんな雑誌が含まれるかが確定しているわけではないし、内容も多様で全体像をつかむことは難しい。とはいえ、ポピュラー文化としてはそれなりの影響力をもち、決してマイナーなジャンルというわけではない⁽¹⁾ので、このように素描を試みることは無意味ではないだろう。

はじめに、本稿がどのような研究の中に位置づけられるかを考えておきたい。ナチュラル系雑誌は「ナチュラルである」という表象と関わっている。何かが「ナチュラルである」ことは必ずしもそれが自然の何かであることを意味するわけではない。ナチュラル系のファッションは意匠として自然を想起させるだけで必ずしも人工物を削減したり排除したりしているわけではないが、たとえばそれが自然によって表象されるものを疑似的に表象しているとすると、間接的に自然を表象していると見ることもできる。そうすると、自然の表象とかかわる研究の中に位置づけることはできるだろう。

ローレンス・ビュエルらによる、アメリカのエコクリティシズム(環境批評)の視点からのまとめ(Buell *et al.* 2011=2014)によると、文学批評は従来

から、背景である環境に一定の関心を寄せてきたが、20世紀後半になると、環境史や環境学、社会科学の知見を本格的に取り込むようになった。とりわけ西暦2000年代から始まる「第2波」では、大都市の自然を題材とする文学を対象にしたり、自然／文化の二元論を否定したり、自然という概念そのものを時代遅れとみなしたりしてきた。

対象は文学に限らない。キリングスワースとパーマーによる「環境修辞学」の研究(Killingsworth and Palmer 1992)は、科学から人文学まで様々な分野でよく使用される学術的言説の比較修辞学的な分析を行なっている。それ以来、エコクリティシズムのなかで環境修辞学研究が活発になった(Buell *et al.* 2011=2014)。

自然の表象とかかわる研究は、社会学の中にもある。日本の環境社会学には、西洋の古いロマン主義的な自然観、特に自然と人間の二元論的な対立図式を脱して、環境を考えようとする流れがある。この流れは、さきほどの環境批評の「第2波」とも通じている。

文学以外のジャンル、たとえば映画、音楽、広告などでも、環境や自然を扱う作品の研究はある(Whitley 2008; Murry and Heumann 2009; Rothenberg 2002; 関谷 2007など)。

ナチュラル系雑誌の分析は、なかでも特にポピュラーな作品の分析に近いかもしれない。しかし、一部には本格的なエコロジーを目指した雑誌もあり、すべてにおいてそれが当てはまるというわけでもない。また、このジャンルに当てはまると思われる雑誌が、一貫して「ナチュラルな」ものを取り上げているわけでもない。

そこで、メディアとしての「ナチュラル系」の雑誌が、だいたいどのような媒体から成り、そこでどのような考え方が語られているかを概観したあと(第2節)、一部の記事を取り上げ、そこで用いられている言説を少し詳細に分析することにした(第3節)。したがって、本稿だけでナチュラル系雑誌のすべてを理解しようとするものではない。

2 ナチュラル系雑誌という分類

(1) 「ナチュラル系」に含まれる雑誌

まず、「ナチュラル系」とはどのような分類で、そこにどのような雑誌が含まれるか。

全国出版協会・出版科学研究所の『出版指標年報』では「女性誌」の分類の下に「〈シンプル&ナチュラル・ライフスタイル〉」という下位の分類がある。この名称が登場するのは2004年で、前年に創刊された『kunel(クウネル)』(出版はマガジンハウス。以下同様)がヒットし、同じ路線の『リンカラン』(ソニー・マガジズ)、『天然生活』(地球丸)が前後して創刊され、これ以降毎年レポートされている。『出版指標年報』の記述によれば『クウネル』は「シンプル&ナチュラルをコンセプトとした癒し系のライフスタイル誌」(2004:170)⁽³⁾で「消費文化に対するカウンターカルチャーとして、都心の20~40代に幅広く受け入れられた」(2005:186)。また、ヒットした原因を「バブル崩壊と長期不況を目の当たりにし、量より質、モノより精神的な充実を求める女性が増えている」(2004:170)からであると記載している。

「幅広く受け入れられた」とは言え、少なくとも当初の広がりには限度もあった。2004年時点で先に上げた3誌は手堅く売れていたようだが、増刊やムックの形で相次いでいた追随誌は売れ行き不振だった(2005:186)。また、分類に含まれる雑誌の推定発行部数も2006年時点で244万冊あったが、徐々に減少し、2009年には155万冊まで落ちた。広がりへの限度は内容面にも見られる。2005年創刊の『ナナムイびと』(風土社)は「硬派な作り」のスローライフ誌であったが、読者が「ここまで本格的なエコロジカルを求めている」(2006:169)⁽⁴⁾からか売れ行きは厳しく、1年で廃刊になってしまった。

この時点までの『出版指標年報』の〈シンプル&ナチュラル・ライフ

タイル〉誌は、女性誌の多くの読者に影響を及ぼすほどではないが、このコンセプトに関心をもつ一部の層を確実にもち、しかしそうは言っても、逆にあまりにも硬派なエコロジーを志向するものでもない、という位置づけだった。しかし、2010年に『リンネル』（宝島社）が月刊化されてから、記述が変わる。推定発行部数は2010年に前年の1.5倍の234万冊、2011年にはさらに2倍の465万冊に増えた。それ以降も部数は徐々に増えて2017年には806万冊になった。⁽⁵⁾ また、その増分のほとんどはこの『リンネル』と、同じ出版社による姉妹誌のような雑誌『大人のおしゃれ手帖』によるものである。この間、紙媒体の雑誌そのものが推定発行部数・販売部数ともに20年連続で減少していたから、この2誌は特に目立つ。ただし、誌面のほとんどをファッションに割いた構成と、やはりファッション関連の付録で話題になるという点で、それまでのこのジャンルの雑誌とは異質である。⁽⁶⁾

ここまで『出版指標年報』の分類を見てきたが、もう1つだけ別の分類も見てみよう。

速水健朗(2013)は食の政治性を論じ、日本の食が「フード右翼」と「フード左翼」に分断されていると言う。本稿が論じている「ナチュラル系」の食は、速水の記述では「フード左翼」にあたる。フード左翼は日本の1960年代以降の新左翼運動と結びついていた。オーガニックで自然派の農法を支持し、健康志向をもつ。この層の典型に、『クウネル』や『うかたま』（農文協）といったナチュラルな生活を提案するライフスタイルマガジンの読者が存在すると言う。この系統のいくつかの雑誌として例示されているのは、上記2誌のほか、『KINFOLK』日本版(ネコ・パブリッシング)、『veggy(ベジィ)』（キラジェンヌ）、『murmur magazine(マーマーマガジン)』（エムエム・ブックス）である。

『うかたま』は、もともと農文協が発行する専門誌『現代農業』の増刊として2006年から刊行され、2007年に独立した季刊誌である。食とその周辺の暮らしをテーマにしている。

『KINFOLK』は2011年に創刊された、アメリカ、ポートランドのキン

フォーク社が刊行する季刊のライフスタイル誌であるが、内容は日本の「ナチュラル系雑誌」と似ている。日本版(ネコ・パブリッシング)が創刊されたのは2013年で、創刊号は同じ年に発行されたアメリカ版の第8号の邦訳である。他に、中国版、韓国版がある。日本版創刊号の緒言「WELCOME」(p.1)には、「表紙に記されたサブタイトルが本誌のコンセプト。“Discovering new things to cook, make and do”。つまり、“小さくて新しい発見の日々”を送るということ」とある(英文の方はアメリカ版のサブタイトルである)。その他、『ベジィ』は『veggie ONLINE』の「What's Veggy?」⁽⁷⁾によると「日本初のベジタリアン・マガジン」として、2008年の春に創刊された雑誌である。『マーマーマガジン』は、速水によると「自然志向、オーガニック系雑誌界でもっとも話題を集めて」(速水 2013: 134)いた雑誌だったが、エムエム・ブックスのウェブページ「murmur magazine」によると、2016年⁽⁸⁾に「詩とインタビューの雑誌」としてリニューアルされている⁽⁹⁾。

他にも類似の雑誌はあるだろう。しかし、「ナチュラル系」とそうでないものの境界をあまり微細に論じて意味はない。多かれ少なかれ、自然や、単なる外見や印象も含めた自然らしさをライフスタイルと関連づけて提示する雑誌という共通点があげられるかもしれない。

(2) ナチュラル系の「政治」

ここからはナチュラル系雑誌のコンテンツに含まれる考え方がどのようなにとらえられてきたかを見ておきたい。

さきほど言及した速水(2013)は、私たちの日々の食事は政治意識を反映していると論じている。ナチュラル系雑誌が扱う日々の生活(ライフスタイル)も同様である。ここまでに記した「消費文化に対するカウンターカルチャー」、「エコロジー」といったキーワードが示すように、驚くべきことではない。

『うかたま』は、目次だけを見れば、身近な自然派の美味しい食を取り上げているだけに見えるが、読者によるとその中にも「原発、TPP、放

射能, F1 種, 添加物, GM 作物など, もっとみんなに知ってほしいこと, 自分が知りたいことが, 手に取りやすい形で取り上げられている」(2013 vol.32 の「皆様からのお便り」)。『ベジィ』では, 歌手のカヒミ・カリィが「カヒミ・カリィのベジタリズム」という連載を持っていて, パリやニューヨークの環境問題に関する話題を取り上げている。2013年の Vol.30 では, アメリカ政府が学校給食規定のなかでピザのトマトソースを「野菜」として認定したことと, ある食品関連企業の献金運動との関連を指摘している。同年の Vol.31 では, 生ごみを堆肥にしたりエネルギー発電に利用したりするニューヨーク市のごみ対策プロジェクトを取り上げている。『マーマーマガジン』では, 15号(2012年)から21号(2014年)までアリシア・ベイ＝ローレルによる連載「地球の上に生きるニューガール入門」があった。ベイ＝ローレルは, 1970年にヒッピー・コミュニティでの生活を『地球の上に生きる』で描いていた。

速水は, ナチュラル系雑誌を, そのカテゴリーが生まれる前に休刊した雑誌『オリーブ』(マガジンハウス)と関連づけている(速水 2013: 130)⁽¹⁰⁾。『オリーブ』は, 1981年10月にまず『POPEYE』の増刊として発行された後, 翌1982年5月に創刊され, 2003年まで続いた女性誌である。酒井順子(2014)によると, 内容や対象読者を何度か大がかりに変更しているが, ナチュラル志向になったのは, バブル真っ盛りの1980年代末期である。このころ, 「夏のオリーブ少女は, かわいいナチュラルスト!」(1989年5月18日号), 「ナチュラル・スタイルがいちばん! 飾らない, ムリしない, そんな女の子のための『オリーブ』です。」(1991年6月3日号)と題した特集を組んでいた。

酒井によると『オリーブ』は女性誌の中でも男性に「モてる」ことを志向しない「非モテ系」の雑誌である。「だぶだぶシルエットで天然素材の服を着ても, 異性にはモテません。もっと大人になれば「そんなポリシーを持っている女性は素敵だ」と言う男性も登場したでしょうが, シェーカー教徒に憧れるナチュラル志向の女子高生には, 決して色気は漂わな

った」(酒井 2014: 178)。ここでは、「非モテ」であることとナチュラル系であることが密接に結びついている。女性の自己解放と自然との親和感の回復とを同一視するエコロジカル・フェミニズムのような主張と近づいている。⁽¹¹⁾

3 初期の『クウネル』の場合

前節では、ナチュラル系雑誌というジャンルの概要を述べたが、それだけでは雑誌の中で具体的にどんなことが論じられているかがわからない。そこで、このジャンルの始まりに位置すると思われる『クウネル』の初期の記事を読み、そこでどのような言説が見られるかを確認したい。前節で見た通り、「ナチュラル系」というジャンルは多様なので、初期『クウネル』の一部の記事で見られたことが、ジャンル全体を代表しているとは必ずしも考えられない。⁽¹²⁾しかし、初期のコンセプトを確認することはできるだろう。

前節で述べたように『クウネル』の創刊は2003年(11月1日)であるが、それ以前に雑誌『an・an』の増刊として3冊が刊行されていた(2002年4月1日号、2002年11月15日号、2003年5月15日号)。その後に発行された創刊号の目次には「Vol.4」と表記されている。ここまでの4冊から巻頭の記事を選ぶことにする。なお、増刊の3冊の冒頭では、「クウネルくん」という名のイラスト・キャラクターが紹介されたり、そのクウネルくんによる短いストーリーが語られたりしているので、正確にはその後に置かれて⁽¹³⁾いる長い記事を対象としている。また、2003年に発行された2冊の巻頭記事は、いずれも海外の田舎の生活を扱ったものであるが、ここでは主として創刊号の方の記事を取り上げる。

(1) 「気持ちいい」と「ふつう」——2002年4月1日号

2002年4月1日号の記事は「風の通る部屋。——高橋みどりが考えるふ

つうの生活。」と題され、スタイリストである高橋みどりの自宅マンションとくらしのスタイルの紹介、および彼女のインタビューから構成されている。記事に付されている高橋のプロフィールには「食まわりのスタイリングを中心に手がけ」とあるが、記事は食に限らず生活全般のスタイリングに言及して、彼女なりのライフスタイルを提示するという趣旨である。ここでは、記事中何度か使われている「気持ちいい」と「ふつう」という2つの語に注目して読んでいきたい。

「気持ちいい」は記事中頻繁に現れる形容詞である。高橋は「直線の部屋を探して」⁽¹⁵⁾ (p.16)で現在の自宅にたどり着いたと言う。「安普請の合板の壁と収納が極端に少ないという問題点もあったが、それよりも「ここ、気持ちいい」と感じた、自分の第一印象を大切にしようと思った」。

ここで「気持ちよさ」はライフスタイルの取捨選択を決める基準の核心になっている。この基準を採用することが何を意味しているのかは、この語が何と対比されているか、つまり「気持ちいい」という基準の採択が別のどんな基準の否定とつながっているかを見ることで理解できる。

記事の著者の印象では、部屋の造りが「ずっと直線」でむだがない(p.17)。また、家具らしい家具がなく、ソファとベッドは兼用で、テーブルも天板と脚が外せる組み立て式である。これについて高橋は次のように言っている。

家具家具したものが嫌いなんだよね。形をなしたものが持つてる重さが好きじゃないというか。誰それの何々というのも照れくさいし、もちろんいいソファに憧れないわけではないけど、器に見合わないのを置いてもね。ないものねだりよりも、いまの自分の環境の中でどれだけ気持ちよく暮らせるかってことのほうが私には大事で、そしたら、この部屋にはソファベッドぐらいの軽さが似合うし。何を置くかより風通しがよくて清潔であることのほうが、単純に私は気持ちいいから」(下線は引用者。以下同様)。

ここで「家具家具したもの」は伝統的な家具を表わすと考えたとすると、否定されているのは伝統的な価値観であると言えるかもしれない。しかし、それよりもっとはっきりしているのは、次の「誰それの何々」と「器に見合わないの」である。前者はブランドと言い換えられるし、後者はソースティン・ヴェブレンが言うような「顕示的消費」(Veblen 1899=2015)の対象である。つまり、否定されているのは、他者を参照するという従来の消費スタイルである。従来は「家具家具した」「形をなした」「重い」家具を買うことが、そして何より自分の「器」を大きく見せたり、実際に大きくしてくれるという期待を抱かせたりする家具を買うことが、消費のたしなみだった。しかしこうした顕示的で競争的な消費は疲れるし「気持ち」がよくない。顕示的消費から降りるために導入された基準、かつて共有されていた基準が失われて方向を見失ったときに見つけ出されたのが「気持ちいい」という基準なのである。記事の冒頭から何度か言及されている「直線」も、シンプル(先述のとおり、「ナチュラル」と並んで『クウネル』のコンセプトの一角)を具現化したものと言えるかもしれないが、他方で重要なのは「直線」が高橋みどり個人に「気持ちよさ」をもたらす恣意的な好みの産物であるということであろう。つまりはかつて誰もが一斉に従わなければならなかった消費スタイルの否定である。他者を参照しないことを推奨しているという意味では、「消費の個人化」と考えることもできるだろう。

この記事のもう1つのキーワードは、記事のサブタイトル「高橋みどり考えるふつうの生活。」にも使われている「ふつう」という語である。高橋の回想によると、なんとなく食(のスタイリスト)の世界に入ったが、その言葉の意味がよくわからないまま数年が過ぎた(p.19)。撮影をするときも絵面ばかりを気にしていた。

でも、ここに引越してきた頃からかな。毎日、口に入れるごはんを扱っているのに、自分がちゃんと生活をしていなくてどうする？って気づいて。年齢的な気分もあったのかもしれないけれど、それから、

朝早く起きて、食事を作って食べて、掃除して洗濯するという、ふつ
うの生活を大事にするようになった。

それを聞いた著者は「そういうことでいいんだ。そういうふつうが大切なんだ。それに気づいた時、身体中からとんがったうろこがバサバサと落ちていった」と書く。さて、すでに〈シンプル&ナチュラル系ライフスタイル誌〉を知っている後年の私たちなら、ここで強調されている「ふつう」が何を意味するかわかるであろうが、当時の読者にとってはどうだったか。従来とは違う新しい「ふつう」を導入しようという主旨は、強いて言えば、これらの文章が含まれている節の見出し「意志あるふつうが大切。」(p.18)を読んで初めて理解できたかもしれない。本文には出てこない「意志ある」という重要な手がかりを使って記すなら、ここでは「意志あるふつう」と「意志なきふつう」の対比が想定されていて、新しい「意志あるふつう」が称揚されている。従来の「意志なきふつう」は、単に顕示的消費に値しなかったためな「ふつう」で、「価値ある／ふつう」という二項対立図式の劣位項にすぎない。「意志あるふつうが大切」はこれを転倒させて、あえて意志をもって「ふつう」に価値を見出そうという宣言である。

この記事は最初に刊行された号の巻頭記事なので、『クウネル』という雑誌の考え方を宣言する内容ともとれる。なぜシンプルでナチュラルであることが——少し言い換えれば自然体であること——がよいことなのかかわかる記事と言っているのではないだろうか。

(2) 「王国」の隠喩——2002年11月15日号

2002年11月15日号の最初の記事は「「満ち足りた時間が流れる部屋。——「王国」の住人たち。」と題されていて、3人の人物のライフスタイルを紹介するという内容になっている。まず考えたいのは、サブタイトルの冒頭にある「王国」という隠喩である。文字通り豊かだから「王国」な

のではなく、前号の記事と同様、「ふつう」であるのに「王国」的であるようなライフスタイルを示すのが記事の主旨である。

1人目は、自宅の庭で60種類のオールドローズを育て、それを描き続けている画家で、「バラを育て、描く。その日に会うのが小鳥1羽の日も。豊永ゆき(36歳)」というタイトルが付される。月2回ボタニカルアートの教室で講師をしているということ以外、具体的な経済状況について書かれていないが、「白アリがすごいから、宝くじ当てて家を買いたいんですけど」(p.17)と言うくらい古い家に住んでいて、記事に掲載されている写真を含め、生活としては質素な印象を与える。人の手が入った2次的なものとはいえ、自宅の庭のオールドローズという自然に囲まれ、古い家に住みながら、画家の豊永さんは記事タイトルにあるような「満ち足りた時間」を生み出す。その方法は、一言で言えば「手入れをする」ことのように見える。この空間では自然も古いものも含めて、あるがままのものではないということも「王国」の条件に他ならない。「身のまわりのものは人の手が入ったものでないと嫌なので、何かにつけてヤスリをかけたり繕ったり、豊永さんの手が加わったものが多い」(p.19)。取り立てて何もない空間でありながら、しかしだからこそ少し「手を入れる」ことで、空間を隅々まで支配し「王」になることができる。豊永さんは画家なので、おそらく彼女の手入れは誰にでもできるものではないが、記事で主張されているのはそれよりも、誰にでも追従できるもの、すなわち「ふつう」と「王国」が両立できるという価値の転倒ではないだろうか。だからこそ、著者は次のように書いているのだと思われる。

子供の頃は、誰もが、好きなものだけできらきらと構成された王国をもっている。でも、やがてそれは現実の侵攻を受けて解体、もしくは植民地になったりするものだから、それをほぼ無傷のままに守りきれる人というのは、やはり、そうとうな想像力をもつつわものだと思う。そして、強さをもった人だ(p.19)。

2人目について書かれた節(タイトルは「立ち止まりながら、自分の時間を過ごす。それが彼の選択。高砂隆太郎(27歳)」)でも同様のライフスタイルが描かれる。対象となっているのは、「自分の時間をもつために」(p.21)定職をもたないことを選んだという人物で、著者によれば、「王国」という言葉は彼の部屋を訪れたときに真っ先に頭に浮かんだという。「六畳間+キッチンのアパートのすみずみにまで、彼の世界があった。あるもののほとんどが古道具屋やバザーなどで探してきたもののだというが、豊永さん同様、彼の手が加わっていないものはない」。部屋は代官山に近い都心というが、目の前に区が管理する手つかずの緑地があるというので、自然や古いものに囲まれた環境であることがわかる。「いつかは森や湖があるきれいなところに行ってさ、静かに考えごとをしながら暮らせたら、いいよね(p.20)」とも言っている。また、彼自身「自分の時間」を過ごすあまり「あまりにもふつうの人と離れちゃったかなと思う瞬間はドキッ。ってしたりもするけどね(笑)。でも人と自分をくらべるということは、ずいぶん前にやめたんだ」と、顕示的消費の否定を想起させるような発言もしている。

3人目(「子供に伝える豊かな心の王国。心の声を聞けるよう。鈴木りか(37歳)」)は、2人の子どもをもつ女性で、夫はアメリカに単身赴任中のため3人で暮らしている。記事に記されているライフスタイルの大半が子育てと関わっている。ここでの「王国」の隠喩は、夫の不在に起因して、子どもへの影響力が大きくなっていることと無関係ではないだろう。ただし、それは子どもの自発性を重視する方向での影響力である。

たとえば10歳の長女は、「ママゆずりで手作りが大好き」(p.25)で「編みものや縫いものにせっせと精を出す。最近は魔女に凝っていて、知らない間に鈴木さんのいらない洋服を解体して、「ヨージ・ヤマモトみたいな」衣装を作っていた」。ここで「そんなふうには子供の内から湧き出る力や遊びの時間を奪ってしまうものを、鈴木さんは怖いと思う」と書かれている。おそらくそのためだと思われるが、鈴木さんは子どもたちにテレビを見せない。「知らなくちゃいけないことはあるけれど、でも、子供が知らなく

てもいいことや見なくてもいいこともある。そこから彼らを守りたいと思うんです」と言う。著者が鈴木さんに、2人には将来どんな人間になってほしいと思っているのかと尋ねると、「そんなのないない。生まれてきたままに」とにっこり否定し、「自分がどんな人間になりたいのか、何をしたいのか、それは自分で見つけてもらいたい。心の深い部分から自分が本当に望むものを見きわめられるように育てるのが私の使命で、あとは自分たちで、ね」(p.25)と説明する。

ここには独特の考え方が現れている。つまり、子どもは本質的に良いものをもっていて、周囲の誰かが気を配ることでそれが発現するという考え方である。子どもに何かを加えることではなく、逆に彼らの良い面が現れることを妨害している何ものかを取り去ることを重視すると言い換えられる。同様の考え方は、先に引用した1人目のセクションでの「子供の頃は、誰もが、好きなものだけできらきらと構成された王国をもっている」(p.19)という表現にも表れている。これが正しいか間違っているかではなく、他でもない〈シンプル&ナチュラル系ライフスタイル誌〉でこのような修辞がとられているということに注目したい。同様の修辞は直後のエピソードにも出てくる。鈴木さんは、子どもたちが成長して自分の時間がもてるようになるとリヤーという楽器を習い始めたそうだが、楽器についてこのように言っている。「弾いていると、音とか音楽の本質に近づく気がするんです。変なんだけど、ようやくここに帰ってこれたという安らかな気持ち」(p.25)。

また、鈴木さんは「子供と生活することって、自然をそのまま受け入れることかなとも思う」と言っている。記事では、「庭の蜜柑の葉についた青虫に名をつけ……、蝶になるまで3人で見守ったこともある」というエピソードが紹介されている。ここまでの3人の紹介は多かれ少なかれ、自然との関わりに言及するものだったが、3人目の鈴木さんのエピソードが最も深く自然に関わっている。関わりの深さは、先の「生まれてきたままに」とか「音とか音楽の本質」という修辞にも現れている。

この修辞は私たちが自然を理解するときになじんでいるものである。科学人類学者のブリュノ・ラトゥールは、フランスの国立工芸学校にあるエルネスト・ブラマールの彫刻「科学の目の前で自らの姿を示す自然」に見られる自然の通俗的な理解を批判している(Latour 1996=1999)。彫刻は自らヴェールを取り去ろうとしている女性の裸像で、女性の身体が、科学によって見いだされるべき自然を表わしている。自然の真実はヴェールで覆われているだけで厳然と存在するという前提がある。しかし、ラトゥールが研究者たちの活動を通して見出したのは、「この彫刻の神話とは逆に、真実とは、被われ、豊満で、設備や器具を備え、金がかかり、展開され、豊かであることを示しており、また、研究者たちは、滑稽な覗き見ショーもどきに世界を眺めているのではない」(Latour 1996=1999: 273-274)ということである。

3人目のエピソードは、この節で読んでいる記事の中では例外的に、自然という本質が実在しているという理解に基づく内容になっている。同じように、対象となる物や人に「手を入れる」ことで「王国」を築くという内容であっても、先の2つのエピソードとは異質であると言えるかもしれない。

少し長くなったので、この記事についてまとめておく。記事では、質素でありながら、自分なりのライフスタイルで満たされた居住空間を「王国」と呼んでいる。ライフスタイルの背景にある価値観としては、自分で手入れをすることで所有物の価値を上げる、自分の時間をもつ、子供がもともと(自然に)もっている力を引き出すということが含まれている。記事としては、質素でありながらも「王国」的であるような価値観を提示する内容である。

(3) 田舎の生活 — 2003年5月15日号、および2003年11月1日号

2003年に発行された2冊では、海外の田舎の生活が紹介されている。

2003年5月15日号の「ロンドン郊外 オルニー村のパンケーキの日。」

では、ロンドン北東部にある「慎ましくのどかな村」(p.7)のパンケーキレースを描く。パンケーキレースはキリスト教の復活祭に由来する500年以上続く習慣で、参加者はフライパンにパンケーキを載せてもったまま教会まで走る。

2003年11月1日号(創刊号)の「ロシア週末の家——ダーチャ便り。」の舞台はロシアの郊外で、「ダーチャ」とはモスクワ市民が週末に過ごす田舎の家を指す。記事によると、ダーチャができ始めたのは旧ソ連時代の1970年代で、国や勤め先の会社が報酬がわりに土地をくれたので、その土地にほとんどの人が自分で家を建てた。当時のモスクワは物資不足で、家族が飢えてしまわないように自給自足をし、すべてが凍てついてしまう北国の冬に備えて食糧を蓄えた。しかし、取材時には豊かになって、レジャーとして畑を耕したり保存食を作ったりする場所になった(p.13)。標準的なダーチャのサイズは2～3部屋で、小さなペチカ(暖炉)がある。1艘のボートのような小さなダーチャがある一方で、経済の自由化で台頭したニューリッチ層はプール、テニスコート、冷暖房が完備した豪華なダーチャをもつらしい。

記事ではいくつかのダーチャが取り上げられている。

これまでに見てきた記事よりもずっとはっきりと自然との関わりが描かれる。最初に取り上げられるインナとスエタ姉妹のダーチャではピクルスが作られ、「素材の味がちゃんとする」(p.12)。小屋に近いサイズの慎ましいダーチャでは、そこに住む老人から「摘みたての宝石のようにみずみずしいベリーや、もぎたての濃いにおいのするきゅうりや人参のお土産」をもらう。

ただしその自然は、ただ過ごすための場所ではなく、むしろ2002年11月15日号の記事にあるような手を入れる対象である。「元軍隊のえらい人」(p.16)サーシャと元物理学者のバレンチナという年金暮らしの夫婦のダーチャは、夫のサーシャによる自作である。また、先にあげたピクルスをはじめ、ダーチャは庭の菜園で家族が食べる分の作物を育てて夏に収穫し、

保存食にして町の家を持ち帰るための場所である。きのこ(グリブ)も自ら森を歩いて採取する(p.17)。そして、

子どものころから親に連れられてきのこ狩りにいそしむ彼らにとって、毒きのこの見分けかたなどは常識以前。おいしいトマトの栽培方法やジャムの煮かた、保存食の塩加減についても、おそらく同世代の日本人の何十倍もの知識が身についている。

というように、自然との相互作用は、この場所で蓄積された知識によって支えられている。

この記事に見られるもう1つの特徴を見ておきたい。自然と関連づけるように描かれているのが、取材記者と現地の対象者との関係性である。

こんな突然の無礼きわまる訪問を、怒ったり拒絶したりした人は、じつはひとりもいなかった。パジャールスタ。どうぞ、どうぞと気楽に招き入れてくれ、照れながらも寝室までを見せてくれ、摘みたての宝石のようにみずみずしいベリーや、もぎたての濃いにおいのするきゅうりや人参のお土産まで持たせてくれた。

はたしてモスクワの空港やホテルで出会う無愛想なロシア人と、ほんとうに同じロシア人なのだろうか？

そんなふうに訝ってしまうほど、ダーチャにいる週末のロシア人は陽気であたたかい。きっと、制服と一緒にビジネス用のしめめ面もモスクワに脱ぎ捨ててくるのだ。そして、こっちの顔がほんとうなんだろう。(p.16)

ダーチャの関係性は都会のそれと対比され、友好的で、その原因はダーチャの環境に帰されている。そして、ダーチャの顔が「ほんとう」と推測されている。都会の人間関係は人間の、あるいは少なくともロシア人の本

来のそれではないという人間関係観がある。

そして、サーシャとバレンチナの夫妻についても、

チャーミングで、仲睦まじくて、見ているとこちらの顔がにこにこするようすてきな夫婦だった。でも、もしも現役時代のふたりに、ダーチャでなくモスクワで会っていたらどうだろうと考えてみた。制服を着たサーシャは、こんなに冗談を言っていて私たちを笑わせてくれはしなかっただろうし、バレンチナの仔犬のような瞳の温度も、きっとずっと低かっただろうと。いまだから、ここだからこそ、心がつながった。出会いはそれだけでやっぱり奇跡だ。(p.17)

と友好性についてほぼ同じ内容が繰り返されている。

ただしここで「出会い」の「奇跡」という表現が使われているので、人々の関係性について少し論じておく。記事では都会の関係性とダーチャの関係性とが対比されているが、これをたとえばフェルディナント・テンニース(1887=1957)の古典的なコミュニティ論にあてはめることはできない。前者はゲゼルシャフトの関係性であるかもしれないが、後者はゲマインシャフトのそれというわけではない。ダーチャがあるのは、古いコミュニティをもつ村ではなく、モスクワのような都会に住む人々が最近になって使うようになった郊外である。この記事で田舎に期待されているのは、後期近代の関係性、つまり関係の形成、解消が比較的自由にできるようなそれである。⁽¹⁷⁾「自然」という語で期待される田舎の人間関係は、旧来の固定した(ある意味で煩わしい)人間関係ではなく、流動的で自由度の高い比較的新しいタイプの関係である。したがって、単純に都会と対比しながら「ほんとう」の田舎を称揚するのとは少し違い、より現代的な社会状況を反映している。⁽¹⁸⁾

4 おわりに

本稿では「ナチュラル系」雑誌全体を概観した(第2節)あと、初期『クウネル』の4つの記事を少し詳しく読み、そこに含まれている考え方を拾い出してきた(第3節)。

『クウネル』の最初の2冊の2つの記事は、それまでの価値観を否定し、この雑誌ならではの価値観を提示する内容である。他人からどう見られるかではなく、個人の感覚をもとにふつうのライフスタイルを築くことが称揚されている。続く2冊の2つの記事のうち、本稿では特に4冊目の記事を詳しく見たが、ここには最初の2冊で提示されていた「価値あるふつう」の一環として田舎の生活が描かれていると見ることもできる。

これ以外に複数の記事で通底しているのは、物や自然に対する能動的な関わりである。2002年11月15日号の記事では、身の回りのものに「手を入れる」ことで「王国」を築くことが称揚されている。2003年11月1日号では、都会暮らしの人が自分たち自身の食のために、いわば「切り身」ではなく「生身」の自然と接することができるという生活を描いている。

鬼頭秀一は、人間—自然関係を表わす概念区分として「生身／切り身」を提唱した(鬼頭 1996 : 126-131)。この区分は、人間と自然の二元論的な対立図式を脱して、両者がかかわりにおいて理解するために提示された。たとえば、私たちが町なかで食において自然に接するとき、それは「切り身」の肉のように、その動物がどう育てられ、屠殺され、流通したかというようなさまざまな社会的・経済的リンクを知らずにすむ。むしろ知ることができない。これにたいし、田舎で、猟のような生業として、食肉となる「生身」の動物と直接接する場合は、その過程で社会的・経済的リンクをすべて目の当たりにしていることになる。

初期の『クウネル』が唱導しているライフスタイルは「切り身」を否定しないまでも、あるいは否定することなく、しかし同時に「生身」を回復

するものであるように思われる。このような立ち位置は、ロマン主義的な自然観と具体的にどのような違いがあるのかといったことは、あらためて論じる価値があるかもしれない。

注

- (1) 『出版指標年報』によると、「シンプル&ナチュラル系ライフスタイル」というジャンルに含まれる雑誌の推定発行部数は、2017年にピークを迎え、806万冊(女性誌全体の約4.2%)となった。これは同年のティーン向けファッション誌の824万冊(ローティーン向け351万冊、ミドル・ハイティーン向け473万冊)と同程度。
- (2) 鬼頭秀一(1996)など。また、1990年代のアメリカの環境倫理で環境プラグマティズムが登場し、影響を受けた日本の倫理学者は里山に注目するようになった(松村正治・香坂玲(2010:190)。里山は人間と自然の二元論を超える象徴になっている。
- (3) 『出版指標年報』は年に1回発行され、前年の出版動向を報告するもので、たとえば2003年版は2002年の動向が、2004年版は2003年の動向が記載されている。以下、出典の記載が煩雑になるので、発行年とページ数のみ「(発行年:ページ数)」のように記す。
- (4) 国立国会図書館人文総合情報室(2018)によると、『出版指標年報』の「発行部数」は、取次ルート経由した一般出版物の流通動態を推計したもの。
- (5) しかし〈シンプル&ナチュラル系ライフスタイル〉誌の推定発行部数は、9年目の2018年には減少して648万冊となった(前年から19.6%減)。『リンネル』、『大人のおしゃれ手帖』の減少(それぞれ23.3%, 20.0%)が大きい。
- (6) 2013年のビジネス誌のインタビュー(長瀧 2013)で、当時の『リンネル』編集長は「以前「エシカルに近いの?」と聞かれたことがあります、それもまた違う。環境への配慮とか、そうした高尚な精神があるものというより、リラックス感とか、気軽さというのでしょうか」と述べている。他方、トートバッグなどの付録については、「作り込みは細かい」と言う。
- (7) 見られるように、英語から日本語への意識に際して「小さくて」という形容詞が付け足されている。これは、ナチュラル系雑誌のコンセプトには不可欠とは言えないまでも、考え方の一端を示す重要な要素であろう。
- (8) 2018年10月28日取得, http://veggy.jp/whats_veggy。
- (9) 2018年10月28日取得, <http://murmurmagazine.com/murmur-magazine/>。
- (10) 『オリーブ』に執筆していた酒井順子も、「2003年、マガジンハウスから『kunel』(以下『クウネル』)が創刊された時は、そこに全盛期の『オリーブ』の残り香を感じたものです。かつて『オリーブ』で活躍されていたスタ

- イリストさん達も登場していましたし、エコでナチュラルでオーガニックで生成り……的な生活は、かつてのオリーブ少女に似合うもの」(酒井 2003: 228), 「しかし気がつくとき世の中には、『クウネル』以外にも、『オリーブ』のおいがするものが溢れているのでした」(酒井 2003: 229)と書いている。
- (11) ただし、「非モテ」を、エコロジカル・フェミニズムの言う「女性的原理」と同一視することは容易ではないかもしれない。なお、ここではエコロジカル・フェミニズムの例としてキャロリン・マーチャント(1980=1985)を参照している。
- (12) 『クウネル』自体も、登場以来ずっと同じポリシーを通していているというわけではないらしい。2016年1月に発行された3月号から編集長が交代し、リニューアルしたが、このときの旧来の読者の困惑は「クウネル・ショック」と呼ばれている(猪谷 2016a)。読者の1人によると、新しい『クウネル』は「普通のファッション誌」になっていて、「これを見た読者は、もう「クウネル」とは思わない……。中もタイアップ記事で、商品がたくさん紹介されてて、「モノを売りたいんだな」とわかる。表紙も赤くて、なんだか「楽天」感があります(笑)」と言っている(猪谷 2016b)。前節で見たように、『出版指標年報』では初期の『クウネル』は「消費文化に対するカウンターカルチャー」として受け入れられたと紹介されているので、大きな方向転換とも思える。ただし、リニューアル後の『クウネル』も『出版指標年報』では〈シンプル&ナチュラル・ライフスタイル〉誌に含まれている。
- (13) 以下で取り上げる4つの記事はいずれも「文……鈴木のみこ」と記載がある。鈴木のみこは、岡戸絹枝と並び、当時の『クウネル』の編集者である。
- (14) 記事タイトルや見出しに句点があるのは誤記ではなく、以下で取り上げる4つの記事の共通の特徴である。
- (15) 以下、引用末尾の括弧内に掲載ページを記しているが、同じページからの引用が続く際は、最初の引用のみページを記して、以降は省略している場合がある。
- (16) これは2002年の記事であるが、ライフスタイルや物の選択基準に、素直な個人の気持ちや感覚を手掛かりにしようという修辞は2019年現在でも使われている。たとえば2011年に刊行された近藤麻理恵による片づけのハウツー本『人生がときめく片づけの魔法』(サンマーク出版)は、その後40か国語に翻訳され、同じ方法を使ったテレビ番組『KonMari——人生がときめく片づけの魔法』(Netflix, 2019年)も制作された。自宅のスペースを占拠し続ける所有物をいかにして仕分けするか、つまり残しておくか捨てるかを定める基準を、近藤は「ときめく」(英語版では“spark joy”と訳されている)かどうかであると説明している。世界中の「Konmari」信奉者たちが戦っているのが顕示的消費であるかどうかはわからないが、顕示的消費という、かつて

の物との付き合い方の作法が覇権を失った後に導入された個人の感覚(気持ちよさやときめき)の修辞は、物との付き合い方の新しい作法の1つを暗示しているのではないだろうか。

- (17) 最近のコミュニティ論として、ここではたとえばジェラルド・デランティ(2003=2006)、長田攻一・田所承己編(2014)を参照している。
- (18) これに対し、本稿ではあまり言及しなかった2003年5月15日号の記事では、500年以上前からパンケーキレースをしていたという古いコミュニティであるオルニー村を舞台としている。

参考文献

- Buell, Rawlence, Ursula K. Heise and Karen Thornber, 2011, "Literature and Environment", *Annual Review of Environment and Resources*, 36, 417-440.
(= 森田系太郎監訳, 2014, 「文学と環境」小谷一明・巴山岳人・結城正美・豊里真弓・喜納育江編『文学から環境を考える——エコクリティシズムガイドブック』勉誠出版, 193-257.)
- Delanty, Gerard, 2003, *Community*, London: Routledge. (= 山之内靖・伊藤茂訳 2006, 『コミュニティ——グローバル化社会と社会理論の変容』NTT出版.)
- 速水健朗, 2013, 『フード左翼とフード右翼——食で分断される日本人』朝日新聞出版.
- Hofstadter, Richard, 1963, *Anti-intellectualism in American Life*, New York: Alfred A. Knopf. (= 田村哲夫訳2003, 『アメリカの反知性主義』みすず書房.)
- 猪谷千香, 2016a, 「クウネル」のリニューアルはなぜ必要で、何が必要だったのか?」ハフポスト日本版, 2016年2月14日, (2019年8月25日取得, https://www.huffingtonpost.jp/chika-igaya/kunel_b_9229968.html).
- , 2016b, 「クウネル」「つるとはな」「暮しの手帖」を読み比べ——今、私たちが考える「雑誌の本懐」とは?」ハフポスト日本版, 2016年2月23日, (2019年8月25日取得, https://www.huffingtonpost.jp/chika-igaya/kunel_b_9288216.html).
- Killingsworth, M. Jimmie, and Jacqueline S. Palmer, 1992, *Ecospeak: Rhetoric and Environmental Politics in America*, Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press.
- 鬼頭秀一, 1996, 『自然保護を問いなおす——環境倫理とネットワーク』筑摩書房.
- 国立国会図書館人文総合情報室, 2018, 「出版統計の調べ方」, (2019年8月25日取得, https://rnavi.ndl.go.jp/humanities/tmp/pathfinder_shuppan.pdf).

- Latour, Bruno, 1996, "Ces réseaux que la raison ignore: laboratoires, bibliothèques, collections", in Marc Baratin and Christian Jacob (eds.), *Le pouvoir des bibliothèques: La mémoire des livres en Occident*, Paris: Édition Albin Michel, 23-46. (= 田村真理訳, 1999, 「理性の知らないネットワーク — 実験室, 図書館, 収集館」岡田猛・田村均・戸田山和久・三輪和久編著『科学を考える — 人工知能からカルチュラル・スタディーズまで14の視点』北大路書房, 258-277.)
- Lupton, Deborah, 1996, *Food, the Body and the Self*, London: Sage. (= 無藤隆・佐藤恵理子訳, 1999, 『食べることの社会学 — 食・身体・自己』新曜社.)
- 松村正治・香坂玲, 2010, 「生物多様性・里山の研究動向から考える人間-自然系の環境社会学」『環境社会学』, 16: 179-196.
- Merchant, Carolyn, 1980, *The Death of Nature: Women, Ecology and the Scientific Revolution*, New York: Harper & Row Publishers. (= 団まりな・垂水雄二・樋口祐子訳, 1985, 『自然の死 — 科学革命と女・エコロジー』工作舎.)
- 森本あんり, 2015, 『反知性主義 — アメリカが生んだ「熱病」の正体』新潮社.
- Murray, Robin L., and Joseph K. Heumann, 2009, *Ecology and Popular Film: Cinema on the Edge*, Albany: State University of New York Press.
- 長田攻一・田所承己編, 2014, 『〈つながる／つながらない〉の社会学』弘文堂.
- 長瀧菜摘, 2013, 「“非モテ” 雑誌『リンネル』がバカ売れの理由 — ナチュラル系という, 巨大勢力」東洋経済 ONLINE, 2013年12月10日, (2019年 8 月 25 日取得, <https://toyokeizai.net/articles/-/25921>).
- Rothenberg, David, 2002, *Sudden Music: Improvisation, Sound, Nature*, Athens: University of Georgia Press.
- 酒井順子, 2014, 『オリーブの罫』講談社.
- 関谷直也, 2007, 「自然と広告 — 情報文化としての「自然描写」の意味と「自然」「環境問題」を表現する映像技法」山田奨治編『文化としてのテレビ・コマーシャル』世界思想社, 164-183.
- 社団法人全国出版協会・出版科学研究所, 2003-2019, 『出版指標年報』(2003年版~2019年版).
- 篠原雅武, 2018, 『人新世の哲学 — 思弁的实在論以後の「人間の条件」』人文書院.
- Tönnies, Ferdinand, 1887, *Gemeinschaft und Gesellschaft*, Leipzig: Fues's Verlag. (= 杉之原寿一訳, 1957, 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト — 純粹社会学の基本概念』(上・下)岩波書店.)
- Whitley, David, 2008, *The Idea of Nature in Disney Animation*, Farnham: Ashgate.
- Veblen, Thorstein, 1899, *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institutions*, New York: The Macmillan Company. (= 高哲男訳, 2015, 『有閑階級の理論 増補新版』講談社.